

Title	流動性を考慮したアセット・ライアビリティ・マネジメント・モデル
Sub Title	
Author	大村靖稔(Oomura, Yasutoshi) 太田康信
Publisher	慶應義塾大学大学院経営管理研究科
Publication year	1993
Jtitle	
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	修士学位論文. 1993年度経営学 第985号 複写許諾が必要
Genre	Thesis or Dissertation
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO40003001-00001993-0985

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

学生氏名

大村 靖 稔

主査 太田 康信

副査 関谷 章

柴田 典男

所属

太田 康信 研究室

流動性を考慮したアセット・ライアビリティ・マネジメント・モデル

日本においても1993年6月から預金の金利が自由化され、金融自由化が着々と進んでいる。自由化はビジネスを拡大するチャンスでもあるが、様々なリスクの増大を招く。自由化先進国である米国では、そういった状況の中で貸借対照表の両側を見渡して、それらのリスクをヘッジしながら最適な資産と負債の構成を求め、収益を上げていこうとするA.L.M.が、経営管理の道具として定着しており、日本でも使用されつつある。A.L.M.では信用リスク、金利リスク、流動性リスクをコントロールしていくことを標榜しながら、従来の手法は金利リスクの管理にその重点が置かれ、流動性リスクは明示的には扱われていなかったため、本論では流動性リスクを考慮したA.L.M.モデルを、非線形計画法のフレームワークを用いて構築することを目的とした。非線形計画法は、目的関数、制約条件共、そのまま取り入れることができるため、こういったモデルの構築には適しており、基本的なモデルと簡単な仮定で、まずそのパフォーマンスを検討し、モデルを拡張する段階で、取り入れる、流動性リスク、アベイラビリティ等の制約条件について説明し、最後にそのモデルを使って幾つかのシミュレーションを行った。その結果から、流動性リスクを取り入れたモデルの構築は容易であることが示され、流動性リスクと、収益性、及び収益性変動リスクとの関係が示され、現状の都市銀行のリスク値を所与として、最適な資産、負債の構成比率が導かれた。